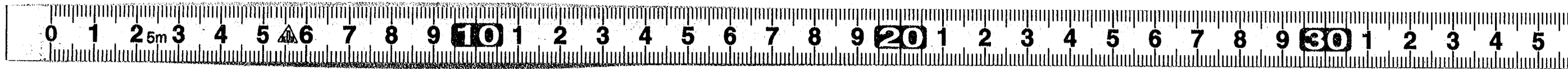


細川文書
80

中外新聞

第 十 號

自十一
至十五
慶應四年四月
三十一日
止



中外新聞第十一號

慶應四年四月五日

横濱在留佛蘭西の教師シャノン氏より一封の書を寄せ且
自筆にて寫したる地圖一枚と是より添たる一小冊とを贈り
來れり其書中の大意を今度江戸にて新聞紙開板に成たる
事誠に以て天下有益の盛業あり何卒中絶これ無き松致一
度以此一小冊を世に公布して益有る書ふれを急ぎ翻譯し
て新聞の中へ差加へられぬ松且又翻譯書往々其實を失ひ
或は新聞紙に於ては事實をきざと略して曖昧ある記し方
これ有るものあり成る丈右松の弊ふ流れざる松希望此事

よ座に云く○右の通々ノワン氏より来りといへ共
吾自ら佛蘭西文を譯する事能はず依て友人入江文郎を乞
て之を翻譯せしむ出板近日あるべし先づ此事を記して
以てヤノワン氏の厚意を酬ゆと云爾

四月二日

柳河春三識

去る朔日 勅使柳原殿江戸へ下着あり

此頃中山陽山陰二道の諸國へ去冬の如く神符の類あまた
降り是より依て至て賑あるより

京都出板の大政官日誌三月中卷八まで既に出来せし由

て友人の許より一冊ツ、送り越しより右を上方にて何
方の書林よりも自由な賣買ある由あれども當時飛脚屋荷
物運送差支へ江戸にて手に入り難し他日善き都合を得
て彼地の書林へ引合ひ此新聞紙と交易して兩地互に相弘
むべきあり

帝鑑間諸藩より京都へ歎願書を出し處處謝罪の儀尤も
いへ共大總督立置られい上も其手を経ずしては 聞し召
され難きよりの付札有之因て駿府へ歸り右願書差出し
大總督に落手し成る由

仙臺へ遣はされし 勅使九條殿并澤殿薩長の兵を率ゐ

松島へ軍船よて到着し瑞巖寺に一泊其後養賢堂といふ學校に滞留のより

大槻平次即ち磐溪も仙臺よて大番頭とあり周旋役を勤め在る由

同家の家老伊達將監是亦歎願書を持て出府の由

近日横濱へ来著あるべき人名も東久世前少將肥前侍従并
よ徴士井關齋右衛門大隈八太郎陸奥陽之助等ありと云
去る三月廿六日白銀今里村南部遠江守下屋敷火藥庫破裂
死者二人

○

題しらす

大神は牧

けられつる由名をたすけ何事も一のふり岡の花の白雪

○四月二日は觸書

此度一橋殿田安殿は連名の由歎訴狀一橋殿は持參東海道
官軍 大總督宮は方へは參上且若年寄大目付は目付よも
同相為歎願罷出は處 上様は恭順は謹慎の由誠意相顯も
れは付くも寛大の思召を以て 由沙汰の品は先鋒總督
より 勅諭を以て 仰出さるべくは段仰渡されは付て
え何れも此上兼ての由趣意厚く相守り彌相慎み居は相可
致し

右之趣向へ早く可相觸

四月

○京都は觸書の寫

此度は一新は付石清水宇佐箱崎等八幡大菩薩の稱號止め
させられ八幡大神と奉稱はね 仰出されし事
中古以來某權現或も牛頭天王あど稱し其外佛語を以て
神號は相稱は神社少うらずい何れも其社の由緒は基づき
稱號相改め可申事

但し勅祭の神社を伺出の上相改め可し其餘の社を
裁判鎮臺領主支配頭等へ出相改め可申各相改るの

上も當局へ届出可事

佛像を以て神體と致しは神社を以來相改可申事

附り本地あど唱へ佛像を社前懸け或も鰐口梵鐘
佛具等の類差置きは分も早く取除可申事

今般 王政復古舊弊は一洗を為在は付諸國大小の神社
よおいて僧形よて別當或も社僧あど相唱へは輩を復飾
仰出は若復飾の倭無餘倭差支とれ有る分を可申出は
仍て此段可相心得事

但し別當社僧の輩復飾の上を是までの僧位僧官返上
勿論は官位の倭を追て 沙汰在らせらるべき旨

伺の通を 仰出し事

當今の處衣服を淨衣にて勤仕可致事

右之通相心得復飾いとし面々當局へ届出可申上ひ也

辰三月

神祇事務局

○ 比叡山并三井寺の僧徒へ還俗の事を 仰出されしものと
の風聞有り虚實いまだ詳ならず

勅使橋本殿柳原殿昨四日は入城即日池上へは歸りあり

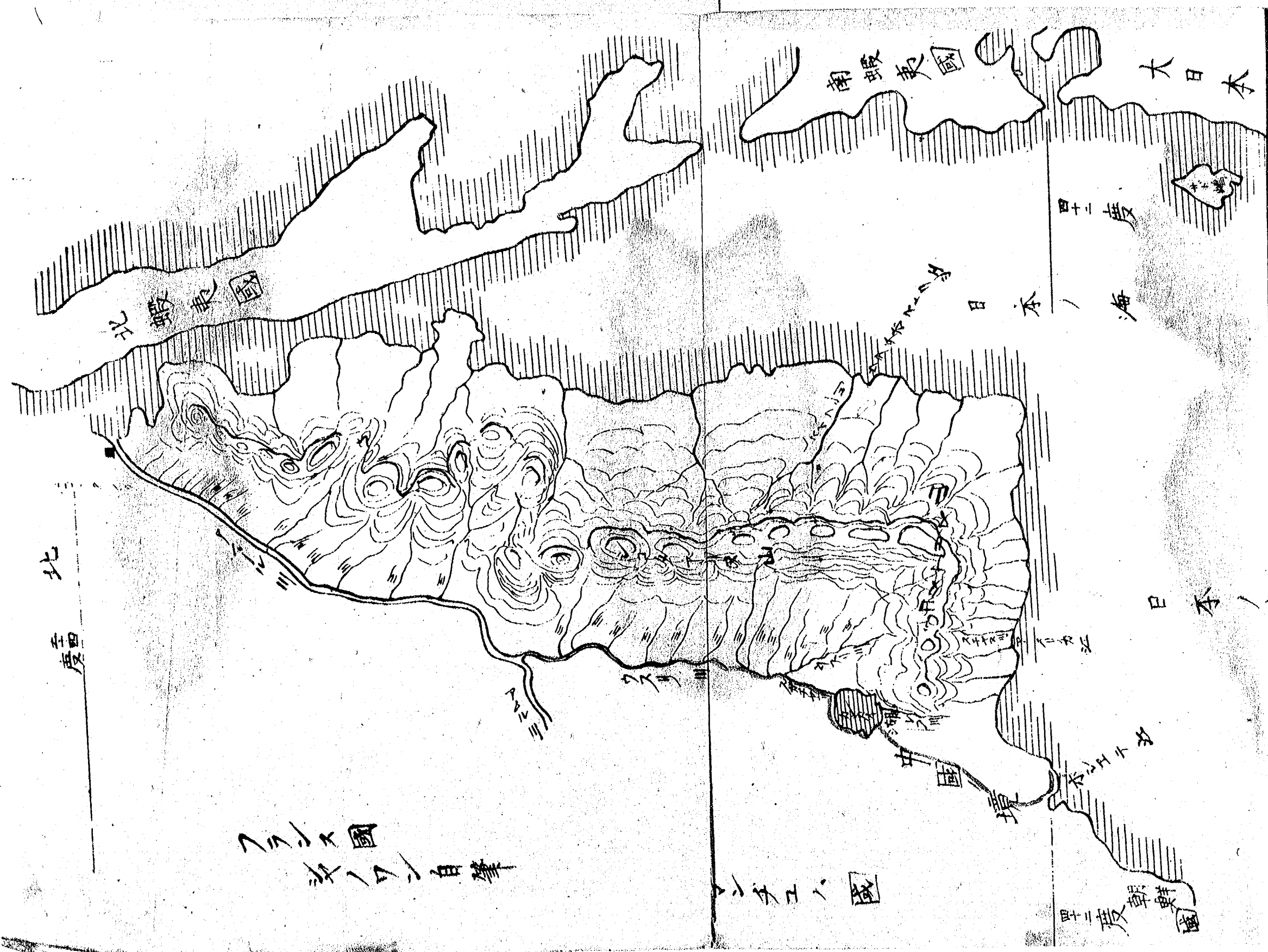
亞墨利加より買入する鐵船去る二日横濱に著す軍艦役並

小笠原健藏岩田平作來込みて来る

中外新聞

第十二號

定價二分



北
緯
度

大日本國
自筆ノ次

大日本國

朝鮮國
緯度

日本

日本海

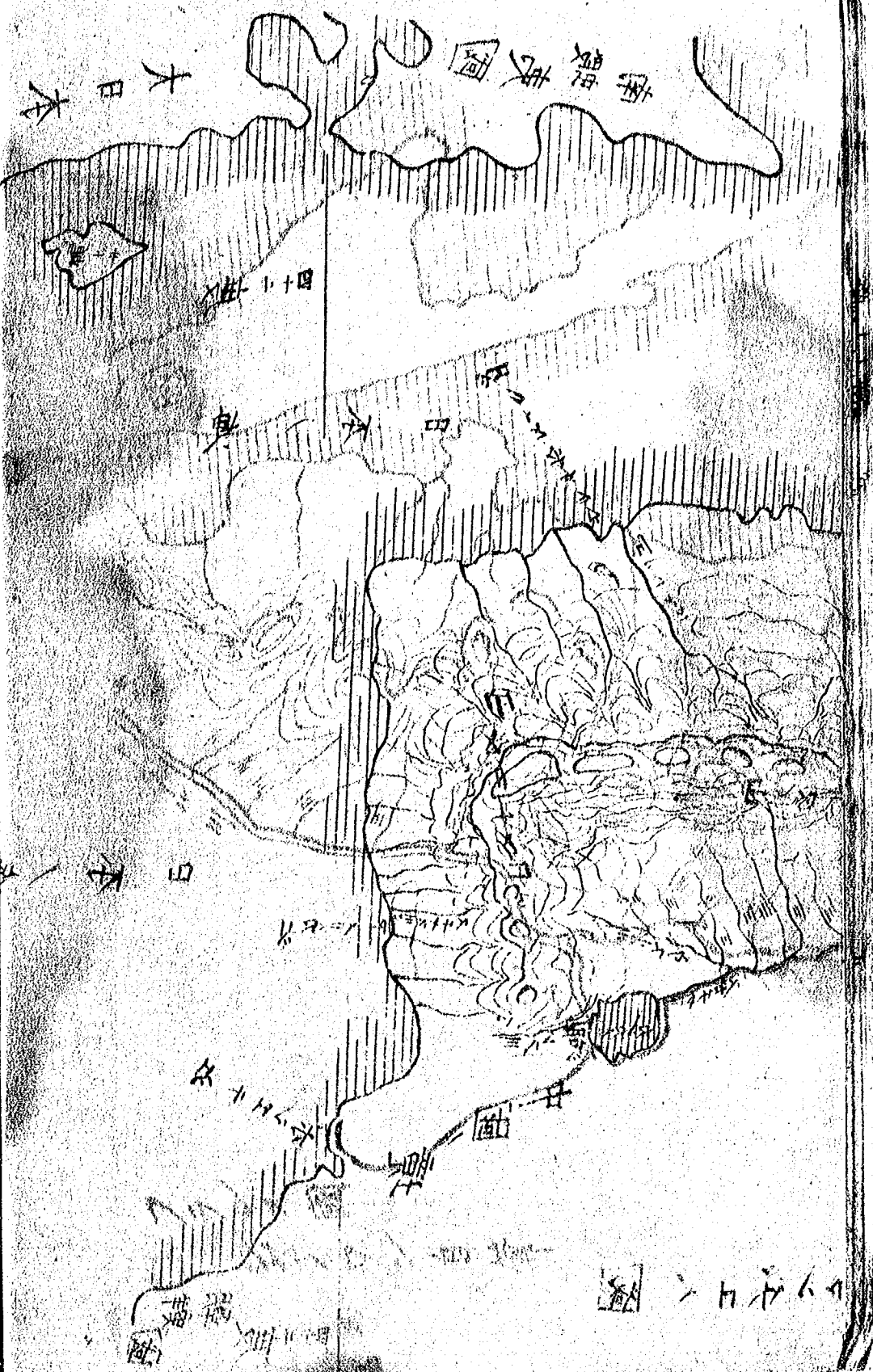
緯度

大日本

南蝦夷國

北蝦夷國

中國



中外新聞第十二號

慶應四年四月十日

御宸翰之由寫

朕幼弱を以て猝に大統を紹き爾來何を以て萬國に對立し
列祖の事へ奉らんやと朝夕恐懼し堪へざるあり竊に考
ふるに中葉 朝政衰へてより武家權を専らより表を朝
廷を推尊して實を敬してこれを遠ざけ億兆の父母として
絶えて赤子の情を知る事能わざる様計りふし遂に億兆の
君たるも唯名のみよ成り果それが爲に今日 朝廷の尊重
を古に倍せしが如くよて 朝威を倍衰へ上下相離る事

霄壤の如くくる形勢よて何を以て天下よ君臨せんや今般 朝政一新の時よあさり天下億兆一人も其處を得ざる
ときと皆 朕が罪おれむ今日の事 朕自身骨を勞し心志
を苦しめ艱難の先よ立ち古 列祖の盡させ給ひ一蹤を履
み治蹟を勤めてこそ始めて 天職を奉りて億兆の君とる
所よ背りざるべし往昔 列祖萬機を親らし不臣のもの有
れむ自ら將としてこれを征しとまひ 朝廷の政すべて簡
易よして如此尊重ふらざる故君臣相親みて上下相愛し德
澤天下よ洽く國威海外は輝きあり然るよ近來宇内大は
開け各國四方は相雄飛するの時よあさり獨我邦のみ世界

の形勢よりとく舊習を固守し一新の效ををうらず 朕徒
らよ九重中よ安居し一日の安を偷み百年の憂を忘るゝ時
を遂は各國の凌侮を受け上を 列聖を辱しめ奉り下を億
兆を苦しめん事を恐る故よ 朕こくよ百官諸侯と廣く相
誓ひ 列祖の偉業を繼述し一身の艱難辛苦を問はず親
ら四方を經營し汝億兆を安撫し遂は萬里の波濤を拓開
し國威を四方よ宣布し天下を富岳の安きよ置らん事を欲
す汝億兆舊來の陋習は慣れ尊重のみを 朝廷の事とふし
神州の危急を知らず 朕こくひ足を舉れむ非常は驚き
種々の疑惑を生し萬口紛紜として 朕が志を成さざら

むる時も是 朕をして君たる道を失わしむるのみあらず
従て 列祖の天下を失わしむる也汝億兆能く 朕が志を
體認し相率めて私見を去り公議を採り 朕が業を助て
神州を保全し 列聖の神靈を慰し奉らしめむ生前の幸甚
からん

右 臣宸翰の通廣く天下億兆蒼生を 思食させ給ふ
深き 臣仁惠の 臣趣意は付末くの者に至るまで敬
承し奉り心得違ひとれ無く 國家の爲は精く其分を
盡すべき事

三月

總裁

輔弼

三月九日 皇帝陛下大政官代へ 行幸在らせられ三職を
召させられ親うら蝦夷地開拓の事件を 臣下問有之は處
一同開拓可然旨を奉答其後酒肴を賜はりし由
同月廿日頃の事ありし下總結城の家臣其主君は叛きて籠
城せしが忽ち落城せりと云ふ
近國所より一揆起りて穩からざる風聞あり看官慥なる報
告あらむ授與し玉ふべし
上方より來りし人の話より京都にて世祿を廢止するの論有

り付て先づ公家より始めざれを天下は普ねく行はるべ
うらず依て公家の世祿を廢する事不日布告あるべしと
の評判ありと云

箱館も奥州諸藩へ引渡して成る由彼港の江戸役人等を
近日歸著すべし

北陸道の勅使岩倉殿下著ありて淺草東本願寺に止宿せ
らる

○ウスリ地方の説 圖一枚添 是れ佛蘭西人ノウ

ン氏の贈りし者なり○原本は魯西亞人の著述ニ
して是を佛蘭西文に譯し地學會社新聞冊の中ニ

載せしり即ち今一千八百六十八年の刊本あり

入江文郎 譯

去る一千八百五十九年魯西亞政府より黒龍江

圖中はアムール川とある者即ち黒龍江あり

ウスリ川及び其屬地の水邊并は東海の岸に蕃殖せる樹林
を見分する爲は樹林掛り甲必丹ブダイクチフ氏を頭取とし
て三人の地形學者を遣はし此諸士官四年間穿鑿を成
し學問上は甚切要ある箇條を多く集録せり叔ブダイクチフ
氏も其僚佐の集めたる材料と自己の考索とを依りて三部
の書を著ししり其標題左の如し

第一黒龍江ウスリ川及びウスリの向岸の地方は生殖する
諸種樹木の事を記したる物産書

第二此度尋ねたる地方は於て魯西亞より植民するに適當
ある場所の樹林の記

第三此地方の風土の概略

右の書を姑く差置きブダク左フ氏黒龍江ウスリ川の邊及
び東海諸岸の國土の圖を作れり其圖の大きき真形二百萬
分一にして右の諸士官の集説及び前人の諸書は據りて作
れる者あり

其穿鑿したる海濱の國土を北緯四十二度より五十五度よ

至り英京グレートブリテン島の東經百三十度より百四十二度よ
至る是れ遠大の曠土ありて其内の諸地方を氣候土性地形
甚不同あり此地方の内重立ちたる山脊をいへるシコタ
アリン山脈より黒龍江と東海に注入する諸川との間隔
を成す此山脈をいへる世は著聞せず且其最高峰を幾何か
るを知らず只知れ渡りたる所にて此山北方にて大に低
く成り一方殊にカンカイ湖よりサイフンに往く路の處よ
て終る曠野と成り雨水に依て滋潤を取る

此地方は於て最要用ある湖水をカンカイ湖なりカンカイ
を元來漢語にて地中の海と云ふ義あり種々の讀聲ありて

カンカともキンカともシ子カイとも唱ふ此湖水の積大凡
 五ルスト平方あるもの一千箇あり

五ルストも魯西亞の一里よて我九町五十二間も當る
 其最長き處を第六の固場よりレフーの川口まで九十五ル
 ストよて最廣き四十乃至八十五ルストあり此湖の測
 量いまだ精密あるよえ至らざれ共衆説に據るよ其底五サ
 シーニは過る處無一水涯より一五ルスト離れて其底半ア
 ルシニより深き處を殆稀あり

サシーニを尺の名よて我七尺一寸許アルシニをサ
 シーニの三分一よて我二尺四寸弱よあたる

此湖をセ川の水これに注入す故にそれより出る川をスンガ
 チヤ川あり湖の周圍をすべく曠野あり其野を屢々雨降り
 て灌溉す其時およそ窪き處を變て巨大の湖とかり彼此
 突起する處を小島の如く一千八百六十一年は於て喫水二
 尺の蒸氣船を以てスンガチヤの河道を離れて此曠野を駛
 行しとり山の側面此湖に傾接するを只二ヶ處ありツリ
 ログ固場の邊及び子キエ河口と漁師岩の固場との間ふ
 り湖の中腹はあとり東及び東南の處よてアスキカンカイ
 一名ギウカヤと云へる第二の湖あり長さ三十五ルスト幅
 二五ルストより五五ルストよ至る狭き地腰ありて二湖の

間隔を成す湖の周邊も草木甚ど多うらされども遠く離れ
ざる諸山も松林あり

カンカイ湖も甚ど烈風多し三日の間静かる事を稀なり湖
上より起る烈風暴雨の根原を考究するは湖水の占位せる廣
谷の周圍に於て其山を深谷に斷截せられ温度の僅の變は
て風其斷截の間を吹過するなり

湖より洩れ去る水流スレガチャを湖とウスリ川との間
に地行して曠野を貫けり此川水の湖より出る所は魯西亞
の固場及び支那のろろ湖を建てたりスレガチャ川を屢
溢れて曠野は渾く或は一年の内數度も及ぶ事あり其濱は

を樹木甚稀なり

シタアリシ山よりウスリ灣の直線の方角にてレフ川
五十ミルストの長さ奔注す河邊の溪谷皆豐草の地にして
其源も諸高山の中は在り松杉の密林夾列す河の中腹も樹
林夥し此處は平葉沙梨櫻杏等の樹あり

ポシエテ灣はて一千八百六十一年九月一日より一千八百
六十二年九月一日までの温度レオウムル氏の寒暖計にて
夏十六度五十三分秋四度九分冬は氷點下七度六十二分春
は五度六十一分一年平均中等の度も四度八分あり

ポシエテ灣は大抵氷結する事無し年中著船するは妨無し

ウラヂウストクを一月間或を半月間氷結すオルガ及びウ
 ラヂミル灣は於ては大凡二月半程も凍あり此兩灣の間の
 海の氷も甚薄し且年々必しもこれ有るは非ずポルタエシ
 ペリヤルの港を十一月の下旬より三月の下旬まで凍結す
 カストリニコラエスク二港の間は於ては黒龍江十一月の
 初より五月十日或を廿日頃まで氷の下は潛流すウスリ川
 を只十一月の末は初めて氷を覆ふ然れともノエルの邊は
 於ておらても氷上の通行を試る者無し此川ミマルの邊或
 をそれより前の處まで氷無しスイフシを大凡四ヶ月の
 間凍り其水流甚と迅疾ふれ氷其全面を覆えず且其甚地
 のみ ○譯文尚長ければ後冊は續出ず

○日本國當今急務五ヶ條の事

- 一 我日本を永久獨立國とるへ一決して他國の附屬とあ
 る可うらす
- 二 我日本獨立せんと欲せし是は相應せる國力を起さざ
 る可うらす
- 三 右國力を起さんと欲せし日本國中宜く一致すべし

四 日本國中の一致せん事を欲せし國人をして悉く政府の政に從ふべし

五 國人をして政府の政に從ふべしめんと欲せし政府より廣く日本國中の説を採るべし決して一方の説に泥むべし

右五ヶ條西洋國法學の大綱領に基づきて我國當今の急務を揭示するものなり

戊辰四月 江戸開成所 神田孝平 識

○附西洋國法學に關する書目

萬國公法 既刻 西洋事情 既刻 同外編 近刻

泰西國法論 既刻 經濟小學 既刻 隣草 未刻

英政如何 近刻

○題しらす よみ人しらす

君とおみうらそらうらいとみあふ都もひかもあるまゝの世や

あさひあき玉てふ玉も何うせむ瓦と共にくさけゆく世を

或曰安房守義邦詠

うての使きさうりころ よみ人しらす

あともれく我世もおあし浮雲の上野の櫻今うちるらむ

乍恐以書付奉歎願い

一 私共倭下賤の身を以て恐を不顧奉歎願い候も甚以奉恐入い候儀も此座いへ共是まで數年來泰平の恩澤に浴し候も全く天朝并に徳川家の恩徳澤に此座い處今日の此場合下賤の身よても更に奉存い候も無此座いへ共追々町奉行所より江戸市中へ觸出されい書付等の趣よても乍恐東叡山に謹慎罪を一身に引請諸人の苦を此救ひ遊度辱き思召の程如何も難有奉恐入涕泣の至に此座い然り處追々此先鋒に繰入相成い付市中一同晝夜寐食を忘れ恐縮罷在い何卒廣大の慈悲を以て下

この者共よて安心仕候此憐愍の沙汰に成下置候一同奉願上い以上

慶應四年辰四月五日

連名九十餘人

右に先鋒の宿所へ差出したる歎願書よて駒込巢鴨小石川音羽大塚谷中本郷菊坂邊町々町人總代名主加判の書面あり

○ 中外新聞一號より七號まで再板出來に付近日合本をも仕立書林へ出す可い間は求可成い八號より後の分も再板相揃いた、合本に致す可い事

○ 福澤諭吉の藏板西洋旅案内を上方にて重板いゝ西洋事情後編と名づけて賣出せし者あり其名前住所相分りいゝと板元へは知らせを下度い

重板を萬國普通の嚴禁あり然るは奸商往々此禁を犯す者少うらす此度 此制度は一新の折柄何卒此律を嚴正し玉えん事海内著述家の至願あり

中外新聞

第十三號

定價
每份

中外新聞第十三號

慶應四年四月十三日
同月再板

仙臺侯の建白書

此頃浪華の書信中より此一通を寄せ來る依て即ち印刷す但其寫本極めて匆卒に寫しとる者と見え往々誤脱讀み難き處あり今筆に隨て一二を補正すと雖も尚悉く訂す事能はず看官若し善本を得む幸ふこれを校正せよ

就徳川□□叛逆為追討近日 官軍東海東山北陸三道より可令進發の旨を仰出付て奥羽之諸藩宜知尊 王之大

義相共謀援六師征討之決旨 此沙汰之趣以書付
仰渡猶又會津容保此度徳川□□叛逆と與一 錦旗一砲發
大逆無道可發征伐軍の間臣慶邦一手を以て本城襲撃速
に可奏追討之功旨 此沙汰之趣謹而奉畏い若松東北の一
孤城と雖も臣慶邦一手に襲撃せ 仰付に段々武門の面目
も叶ひ難有奉存い速に一藩中より布告出陣の用意仕 官
軍に進發の期も速に應援襲撃可仕い然處弊藩奥海の濱
に僻在仕道路遠速 朝廷に決議の由深旨も詳細不奉辨幾
内上國之形勢等唯々傳聞而已真偽虚實明白決一難く固陋
一隅の見を以て言上仕い依千萬恐悚之至に奉存いへ共既

は廣く言路を開きせられい上も存付の次第黙止居いてを
臣子の分難盡不顧忌諱左に奉言上い 王政復古 朝議は
一新の折柄一旦天下の兵をば爲動關東 此征伐を爲在い
段々乍恐重大の事件深き 敷慮もば爲在い上とも奉存い
へ共天下之人心歸著仕い事無之いて難に爲成然るに
先達て□□御用被為在參 内可仕旨に沙汰に付會桑等先
手より仕上京仕い中途右兩藩より 官軍へ砲發仕いに叛逆
無紛大逆無道の朝敵に付追討將軍を以て 此征討を爲在
い趣に布告に相成い處□□臣下等布告の趣にて先手の
者關門へ差掛りい節儀に薩藩勢より及砲發不得止爭闘に

至り由有之如何も倉卒紛擾の間砲發いづれ先孰
れ後分明不相辨風聞も有之臣慶那 沙汰の趣を奉疑
□□布告の旨を信いふも曾て無座いへ共發砲前後判
然不相辨より人心疑惑十は八九も可有之是れ人心一定不
仕一條は座い徳川祖先數百年の禍亂を定め攘亂反正大
勲勞も今更上いまでも無之累世偃武修文海内を鎮靜仕
事既は二百餘年の久き及び運流季は屬一武威漸く不
振遂は嘉永癸丑年以來外夷陸續紛至人心駭然其間も□
□處置宜を得ず失體不當の儀不少も可有之いへ共今日は
至り既は政令歸一公平正大の旨を以て 皇國を安んト奉

らんが爲は政權を 朝廷は奉歸以上も又何事を企望仕可
奉背 朝廷哉と人心の疑惑十は八九も可有之是れ人心一定
不仕三條は座い方今 王政復古紀綱一新萬民刮目の
聖運は相當繼天立極萬世無窮のは大策は爲建誠は親民
如赤子民の奉仰 朝廷又如父母一夫不得其所者無きを欽
慕仕は折柄一朝海内の兵を爲動無辜之萬民水火塗炭の
苦は陷りは段可哀可憐之至必 幼帝の 聖慮は爲出い
よも有之間敷と人心の疑惑十は八九も可有之是れ人心一定
不仕は三條は座い□□既は退去仕は後泰然不動恭順罷
在い由然る先年毛利大膳大夫家來共 闕下は於て砲發

仕に段を一時卒爾の誤一旦朝敵の汚名を蒙りいへ共真情
實意明白は相顯れい上も寛大の仁恕を以て官位復
故入京御免を成下い候□□とて一旦祖先の大功を
お爲棄徒らに發砲の前後を以て叛名を爲定めても諸藩
の心服も勿論下く賤民に至るまで感服も仕間敷人心の疑
惑十は八九も可有之是人心一定不仕四條は座は抑又外
夷は交通の途追くは多端は爲成當今既は十餘國も相
及び此時は當りて一旦天下の兵を動し四海鼎沸の勢に至
りいへむ彼等と雖も必ず坐して傍觀も仕間敷各國帝王の
指揮を受け如何ある舉動も及びいも難計然る時もは國辱

を宇内の萬民は爲流の姿も相成人心の疑惑のみから
ず寒心杞憂痛哭仕は者又十は八九も可有之是人心一定不
仕五條は座は彼是を以て深恩熟慮仕は朝廷より出
師追討の途暫くは用捨を爲在□□等は譴責之儀廣く諸藩
の論定を爲爲盡天下と共に正大公明無偏無黨の公論は歸
しは處置を爲在いむ必しも不勞六師彼自ら服從可仕
此段竊は奉懇願企望は古語も輝德不輝兵を先王の美德
と仕又裴晉公の處置得宜能服其心とる格言もは座いへ
む是等の處へは目的を爲爲注王政復古曠世之は成業は
大成を爲在は根仕度臣慶邦微衷は諒察偏は奉希望は若

一不然一旦赫怒萬民の服不服をも以問無之躁急 以追討
と事よても諸藩の向背も難計海内分裂群雄割據慶元以
前は十倍するの大亂を醸し加之外夷其衅を窺ひ 皇國古
今未曾有の事變を生し却て轉福爲禍と申ものよて千萬非
計之得者也臣慶邦竊は痛心恐惶仕は不肖の淺見非論極め
て 以採用よも相成間敷とも覺悟仕はへ共如是 以成運
の機會は黙止仕はてを却て不忠の筋よも當り可申と不顧
越俎謹て奉言上は臣慶邦誠恐誠恐頓首謹言

二月 日

仙臺中將

鴨西外史評通篇叙事詳密章法分明無隔靴之憾假令其言

不必中肯際尚不失黃絹色絲之稱也況其所論確不可拔乎

○四月七日夜 於平岡丹波守宅より渡

塚原寛十郎

名代姓名略す

兼て逼塞を 仰付置は塚原但馬事重罪とるよ依り可な處
嚴科之處格別の寛典を以死一等可な宥 勅諭は付は裁許
の品可なり渡處出奔は付尋出は根可な致は

小野内膳

兼て逼塞を 仰付置は其方事重罪とるよ依り可な處嚴科
之處格別の寛典を以死一等可な宥 勅諭は付永は預の格

揚座敷へは差遣者也

瀧川播摩

兼て通塞を仰付置は其方事可な處嚴科の處格別の寛典を以て處置可致旨 勅諭は付永蟄居を仰付は

平山圖書

同文言

設樂備中

兼て登城見合は相相違置は其方事可な處嚴科の處格別の寛典を以て所置可致旨 勅諭は付永蟄居を仰付は

榎本對馬

同文言

室賀甲斐

同文言 閉門

大久保主膳

戸田肥後

同文言

永井玄蕃

兼て通塞を仰付置は其方事云々同文言

右之通

○
去月廿六日 皇帝陛下自ら御船に乗一玉ひ天保山邊に碇泊しとる外國船を巡見一玉ふ此時諸船より祝砲を發す其聲天に轟くと云ふ是れ横濱新聞に載る所なり

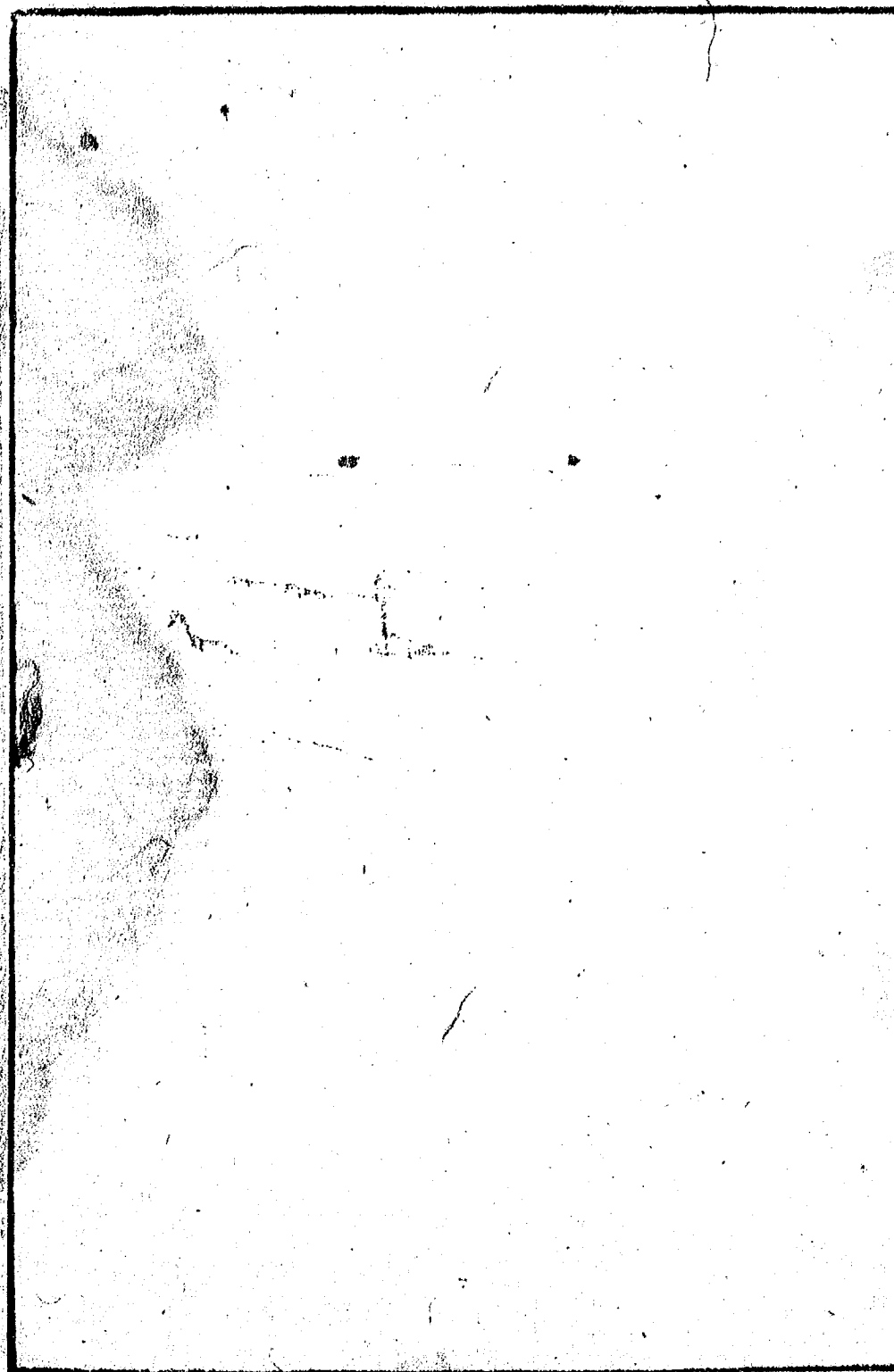
三條殿中御門殿并は毛利淡路守各其嫡子を學藝傳習の爲に英吉利に遣はせり

英人サトウ曰新聞紙を成る丈事實をよく紀して實説を載する能ますべし其故は天下の人民に信用せらるる物なれむ其關係小からざるを以てなり大久保氏の建白會津藩の歎願書ふとを出しとる最も佳なり吾既し英文を譯して新

聞局へ贈れり是れ日本の事情を外國人にも廣く知らしめんが爲なり

○
同人又曰第二號はサトウも土州侯の側は在りと記せり是傳聞の誤あり吾只土州容堂老侯の病は依て醫士ウリスを周旋せしのみ

第十二號も地圖の彫刻摺立手間々とりは故先づ十三號を發兌いしは十二號も一兩日中無相違出來可致し



第 四 號

不 可 翻 印

中外新聞 第十四號

定價一匁

中外新聞第十四號

慶應四年四月十九日

鎮撫使よりの布告

今般海陸進軍いそ朝敵□□硬命の族のみ誅鋤遊されい
敵慮の處當人悔悟謹慎いふ付ても從來の行狀雖不可赦生
靈塗炭の艱苦不為忍罪魁すら猶死一等を宥い上を歸
嚮の輩を勿論既往を不咎才能及び有志の者を抜擢億兆
愛撫の意四海い表示の思召よて徳川譜代陪臣小吏
に至るまで凍餒の患無之松は扶助可成下いふ付疑懼を
不抱此御意を奉戴し士農工商一切安堵營業可致い尚追

闕廷より徳教を宣布しへ共當分徳川祖宗の良法を其儘變更無之の條勤 王一途心得違ひ有之の間敷は且當國諸事訴訟等と聊無忌諱當總督府まで可し出は其上至當公平の裁判可有之ものあり

辰四月

東海道鎮撫總督府

○大坂よりの書狀寫

禁裏様三月廿三日晝時西御堂へを為 入は手輕の 法行幸は道筋も至て穩よて靜は座は

廿六日早天より天保山へ 法幸海岸防禦の様子 法敵覽

船軍の稽古も 天覽は相成は由よて海中へ大筒打込は音市中へ相響きしは

法幸まては市中よても色く惡説を觸はへ共萬事鎮靜の法事よて大は安堵仕は金相場も二百三四十匁まで引揚可しと人氣の處其俊無く下落いよ二百四匁より五匁位は相成は依之大坂表人氣至て穩は座は必は案トは下間敷は

來月五日頃 法發輦よて南都へ 法越夫より 法歸京と中事は座は

三月廿八日

○歎願書

一城の倭と徳川家相續の者相定りいまで一時田安へは預け
けり 仰付け松奉願い甚見越し倭を申上奉恐入いへ
共尾張家へ相續を 仰付け倭を 免奉願度事
一軍艦銃砲と徳川家名は立成下高并領地相極りい上
差上い松仕度事

右二ヶ條格別の寛典を以 免相成い松は盡力の程奉
願い素より有罪の私共右様の件々奉願い倭上と 天朝の
は怒り奉觸いも難計下と主人□□の趣意は背きい倭よと
い共此際は當り百年の生命の爲は千載の汚名を捨置恨

を合て命を奉い松よてと海陸兩軍臣子節操相立不申い
間私共一同の心中は賢察成下幾重も相貫きい松は執
成奉願度此段歎願仕い謹言

四月 日

海陸兩軍一同

○

静寛院宮様 實成院様も田安殿へは移 天璋院様も一
橋は殿へは移座い
上様も去る十一日水戸表へ 免發途相成い
十二日より口々門のは固め左の如し

竹橋 清水 田安 半藏

右四ヶ所田安殿に預

外櫻田 西丸大手 神田橋

右口へ官軍人數は固めあり外櫻田と神田橋とを往來通行あり

坂下 内櫻田 大手 平川 矢來 馬場先

和田倉 雄子橋 一橋

右口へ一切官軍番兵を差置けり事

○横濱新報譯文

四月七日到着の英船より託して長崎在留の外國人某より一封の書狀を贈れり其大意左の如し

此程長崎表の形勢甚穩ならず薩長土三藩互に不和を生じ
いやは或を計略より哉其境を相分らずいへ共市中諸方へ張
札いさし一日を薩長の所置を誹謗し一日を長土の所置を
非難し又次の日を薩上の惡行を書記しあと日々の事にて
三藩の家臣共互に疑惑を生じいしまと戦争よを至り不
いへ共只今の根子よて何時事の起りい哉も難計甚心配
いさし

○信州路報告

此程相樂搃三といふ者并外七人信州追分宿にて梟首せられ外十餘人の者片髪片眉剃落し追放し相成り右に搃三巨魁にて無頼の惡徒を集め官軍先鋒嚮導隊と唱へ總督府の命と偽り信州の村々を亂妨し良民を劫し金銀を貪り其惡事露顯せし故かりと承及申し云々

○箱館來狀の寫

此表にて江戶の招子委數相分らず甚心配仕り會津追討の倭仙臺へ被命し由とりくの噂は座に何故欽仙臺隣國の諸侯仙臺城下へ追々使者差出し殊の外混雜の由は

座に

中外新聞江戸表にて出來の由にて九號まで手を入り望人澤山有之の間幸便に差送可なり下し

奉行衆を初め役々皆當所引拂の筈にて魯西亞國蒸氣船に雇は相成り迎船として相廻りし處勅使は下向の後場所は引渡りし上にて一同引拂は筈に決定いし間今暫出帆延引可仕へ共不遠拜顔可相叶と相樂し

四月二日

海軍局の社中にて内外新報と號する新聞紙出板す杉田玄端著述健全學中編二冊發兌す

柳河春三編輯西洋雜誌卷三去冬彫刻の筈ありーグ多事よ
て延引ー漸く板行出來す此後を毎月一二冊ツゝ差支無く
出來す可ー

偶成

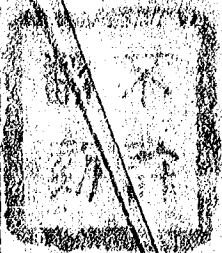
作者不詳

四海今將歸一家此時無用手空又不知心事對誰訴且向春風
數落花

或曰市尹石川氏之作

無題

草莽微言何益世強論時事不勝嗟豈如鴛著一歌酒日訪春園
處々花



中外新聞

第十五號

西曆一千八百九十一年

中外新聞第十五號

慶應四年四月廿日

英漢新聞紙の抄譯

英吉利にてフ・オ・アダムを日本在留全權公使の書記官に任
ぜり

佛蘭西國帝ナポレオンを喘息を煩ひ餘程の重症あり
同國の太子を巴黎を出立し北日耳曼に旅行す

北日耳曼とオーストリア同盟の諸國を云ふ

此程魯西亞の政府より令を下し波蘭國人の兵器を持つ事
を禁し悉く其所有の兵器を取上り但し税銀六ルーブル

を出して其支配より免許を得れど兵器を買ひ求むる事を
得べしこれを所持する者を年々此税を出さしむ

ループルと銀錢の名よりドルの七分五厘は通用す

石川長次郎 譯

○ウスリ地方の説 續第二

ポルタエンペリヤル港の周邊を力を極めて穿鑿をあり樹
林の價を精細に見定めたり千八百六十三年これを輸出す
る人々より賣り與ふる事を決せりブゾクたフ氏の説は據れ
るポルタエンペリヤル港の近邊の樹林を心を用ひて支配

すれど莫大の利益あるべしと云其林の樹木を檜樹落葉松
白樺黃樺黒樺白楊榆樹及び叢生の姿にて柵楓秦皮榆樹菩
提樹榛杉等あり其木の經たる年齢を不同より八十歳よ
り二百廿歳までの間あり其中最も甚大なる樹木少ならず
十分强健より圍三尺高き七丈乃至八丈ある者屢これ有
りポルタエンペリヤル港の地形を船の入津荷積荷卸し等
をみずる悉く便利なる形を具へたり其灣をクレストスカ
ヤコンスタンゴノスカヤ及び沙洲港此三港より成る且イ
ルダシ及びパラタと名くる二小港も亦これに屬す此小港
先年二艘の船碇泊して冬を越えたる所あり

ポルタエンペリヤル港とコイトとの間の地方は在る林は
も黒龍江口は在る者と同じ樹木も雜生せり但し其冬時落
葉する樹木も黒龍江口よりも多く且美麗あり此地方も尚
混沌の稱を與ふべし其故をオロチヨニと名くる遊牧人種
只四十族を栖まりむるのみおれもあり其人も犬と共に只
漁と獵を以て生活す

混沌の原語も處女あり辭書は處女山處女林處女野を
いまも開墾せざるを云ふと注せり又未戰は用ひざる
劍を處女劍と云ひ天生純粹にして精鍊を経ざる硫黄
は處女硫黄の名有り推て其字義を知るべし

魯西亞人の黒龍江に到りし時までも人口甚少くして只河
邊并は商客往來の路傍に僅の住民有りしのみ方今は於て
民人の最多き部も南方よりてサントルガ灣のクニチユニ
あり次も黒龍江口及び其津渡の處次もウスリの谷ありゴ
ラド人爰に住す次も支那の植民其數少けれども此地方の
海岸并は内部に散在す然れども此廣漠なる國土地面の積
大凡二十七萬二千箇平方ミルストありて男女一萬人は満
ちず

青眼居士曰黒龍江邊の地理方今我國人の爲に之を縷説
するも急務は非るに似たり然るにシノワン氏嚮は亞細

亞の地圖を譯して刊行し今亦自ら此圖を寫し記錄を添
て新聞紙局に寄贈する者蓋し深意ありて寓するが如し
試み之を猜するは魯西亞人の蝦夷地方に朶頤するや既
は久し然るは近來亞墨利加の舊領地を沽却し専ら支那
朝鮮の北境を開拓す其志遠大なる事殆測る可らず彼若
し黒龍江邊より南進して朝鮮を蠶食するに至らむ日本
の北部亦唇亡齒寒の患を免る可らず詩に云むすや兄弟
鬩牆外禦其侮と今我國内穩靜ならず動もすれむ全國兵
革の厄あらんとす若し國內變あらむ萬民其業を營み其
生を保つは違あらざ況や邊境の事は於てをやされむ日

本内地の争亂を彼の飽く事無き國人の流涎する所より
て即ちヤノワン氏の暗に憂ふる所あるべく居士の最深
く嘆惜憂悶する所あり

○或る一諸侯歎願書

正月九日十日私名代家來の者を召出 此書付を以て德
川□□ 朝敵の罪に依りて追討せ 仰付に問各藩藩臣吏
卒に至るまで方向を定めし根并し 大號令に趣意相心得
國力相應の人数差出しに根可仕旨に仰渡誠に以て驚愕畏
縮の至し奉存に就ては速に奉 勅從事可仕の處 中朝よ

り郡縣の制度を為在に共 皇國自然に體裁を封建世
祿有之鎌倉霸府の時將軍家臣の名目を相立陪臣陪臣
の分隨て相定り時移り物換り慶長元和以來今日までの形
勢を成し居に依りて凡そ普天之下率土之濱尊卑貴賤不爲
王臣者一人も無之に共封國領邑其治内の士民各其主
其君に忠勤を盡す則 朝廷へ服事の道は可有に座と奉存
に私儀□□家臣に依りて一意に徳川家を翼奉し 朝廷へ
忠勤仕度素志は有之元來一途同路ふて更なる方を異しに向
を二よりす可き所無之追々□□恭順の効相立にえり 寛典
の處置只管歎願哀訴仕度心底は座に又入敷差出に依

を外 用筋に依りて何程にも出精相勤可なりに共徳川
証討てよ付の 沙汰なても不恐臣子を以て君父を撃の
譯は有之人の大倫天地の大經是に於て乎相悖り昔時源義
朝 勅命不得止とてやふがら父爲義を撃にも同様の筋義
朝の逆名千歳難遁 勅命はわらせられにても亦三綱相欠
法度の 失體を終古難に爲免實は私一身の進退難澁の
みは無に座 朝廷のは爲は深くは惜みし上何分奉 勅從
事難仕に陪隸微臣の身を以て直諫仕に依餘り恐入敢て言
上仕兼に共臣子の身進退難澁仕に段幾重にも性情の忍
ひ兼に處は座に何卒 憫察 宥宥の依奉願上は右

願の趣意は採用を下さ置いへる獨れ一家の幸福も無之
心を千歳の下に維持仕今日朝廷の闕失をも聊
と其加至極難有仕合奉存い乍去頑愚固陋遂に
逆鱗を奉犯い次第其罪萬死難遁闕下は拜伏一斧鉞の
誅謹く可奉待旨申付以重臣此段哀痛奉懇願い誠恐誠惶頓
首謹言

慶應四成辰年二月